

視点1 考える必然性や切実感のある**発問**の在り方

「かしの木の下で話し合ったことをロレンゾには黙っていたとき、三人はどんな気持ちだったのだろう。」を中心発問とし、互いに信じ合うことが大切であることに気付かせる。

中心発問について「かしの木の下で話し合ったことをロレンゾには黙っていたとき、三人はどんな気持ちだったのだろう。」と心情面から考えさせた。三人の気持ちが「とても楽しい」というレベルに達しないことを心情バロメーターで表すことで、気持ちの変化が視覚的に捉えられ、心から喜ばなかった原因を考える支援になり、信頼することの大切さに気付かせることができた。

今回は児童の実態に合わせ「互いに信じ合う」という価値に気付かせたいと考え、中心発問を心情面から考えさせたが、「なぜ黙っていたのか」と行動面から考えさせることで、本当の友達についての多様な価値に触れさせ、本時のねらいに迫ることができたのではないかと考える。



視点2 物事を多面的多角的に考えるための**交流**の在り方

三人の中で自分の意見と同じものを選び、その根拠を交流させることで、多面的・多角的に考えさせる。

三人の中で自分の意見と同じものを選び、その根拠を交流させることで、多面的多角的に考えさせた。それぞれの意見や考え方の同異について視覚的に捉えられやすいように赤白帽子を活用することで立場が明確となり、交流が円滑に行われたと思われる。交流の結果、同じ意見でも異なる根拠に触れることで、意見の深化がみられた。また、違う意見の人との交流では、反論も含めて思ったことを相手に返させることで、意見が変容する児童も見られた。

いつも同じ人と交流をするのであれば、様々な意見と出会うことにはつながらない。様々な意見と出会うには、様々な人と交流することが必要であり、そういう機会をつくることで、より多面的多角的に考えられるようになると思われる。普段の授業の中でそのような場面をより多く仕組み、自分にとって新しい価値や考えに出会える場の設定を工夫したい。



視点3 自己の生き方について考えることができる発問と**振り返り**の在り方

終末に「ほんとうの友達とは、どんな友達だろう？」と授業の最初と同じ発問をし、自分の考え方の変容を振り返ることで、道徳的心情を育てる。

最初と最後に「ほんとうの友達とは、どんな友達だろう？」という同じ発問をすることで、自分の変容を実感させたいと考えた。授業前半の発問では「仲の良さ」を友達と考えている児童が多かったが、振り返りでは、うわさに振りまわされず、本人に確認したり、信じ合ったりすることを大切に思う児童が多く見られた。児童にとっては授業の前後の比較がしやすく、振り返りが容易になったと考えられる。また、振り返りについて「新しく気づいたこと、考えが変わったこと、これから大切にしたいことを書きましょう。」という視点を与えることで、児童が今後の生き方について考えやすくなったと思われる。

今回の題材では、最初と最後に同じ発問をすることで、自分の変容を実感させる振り返りを行った。しかし題材によっては最初と最後に同じ発問をすることが難しいものもある。そういった場合にはどのような視点を与えれば自己の変容がより実感できるのかを今後研究していきたい。

